

International Association for Translation and Intercultural Studies (IATIS)  
第3回大会報告

坪井睦子

(立教異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

モナシュ大学主催による IATIS 第3回世界大会が、2009年7月8日から10日まで、オーストラリアのメルボルン、モナシュ大学コールフィールドキャンパスで開催された。大会に先立って7日には、文芸翻訳の促進を目的とするオーストラリア全国機関である AALITRA (the Australian Association for Literary Translation) 及びオーストラリア公共放送局 SBS (Special Broadcasting Service) との協賛により、Literary Translation Workshop、Translation and/or Creation in Multilingual Broadcasting、Mind the Gap: Translation Projects、Analysing Translation Corpora と題する4つのワークショップが行われた。7日の夜には香港バプテIST大学 Martha P. Y. Cheung 氏による最初の基調講演が行われ、続いて John Benjamins 主催の歓迎レセプションが開かれた。翌日の8日朝より正式な大会参加登録手続きが始まり、続く3日間多くの充実した研究発表や実践報告が披露された。

IATIS は、UNESCO の支援のもと、通訳翻訳研究、異文化コミュニケーション研究及びそれに関連する様々な研究分野間の国際的な協力を推進することを目的に設立された学会である。現時点での登録会員数は約270名である。周知の通り上記研究分野はこれまで西欧を中心に発展してきたが、IATIS はそうした西欧指向型とは異なる新たな研究の方向性をめざして、第1回設立大会が2004年に韓国ソウルで、続く第2回大会が南アフリカのケープタウンでそれぞれ開催された。設立から5年目を迎える今回は第3回目となる。第3回大会のテーマは、“Mediation and Conflict: Translation and Culture in a Global Context” であった。世界ではグローバル化が急速に進展する一方で、各地域やコミュニティで経済、政治、文化、イデオロギー上の対立によって紛争や軋轢が絶えない。今回のテーマは、このような世界情勢の中で言語間のコミュニケーション及び異文化間のコミュニケーションをどのように捉え、実践していくのかというまさに現代の重要課題を反映したものであった。このテーマを中心とした包括的なフォーラムとトピック別に設けられた22のパネルに、世界各地からこれまでの大会を大幅に上回る多くの研究発表の応募があった。特に若手研究者からの応募が多数あったことが研究の裾野の広がりを示している。各パネルのテーマは以下の通りであるが、これを見ると今回の大会が従来の通訳翻訳領域の共通課題を包含しながらも現在進行中の様々な問題もその視野に入れていることが分かる。

- Panel 1: Between languages: literary translation in / of the Pacific
- Panel 2: Child language brokering: the ‘unseen’ mediators
- Panel 3: Hidden and revealed: censorship in translation
- Panel 4: Self-translation: brokering originality in hybrid culture
- Panel 5: Mediating conflict in audiovisual texts

- Panel 6: In the footsteps of Ian Mason
- Panel 7: Tourism and international marketing as intercultural transfer / negotiation
- Panel 8: Policy and performance: interpreting in asylum hearings
- Panel 9: 'Small' languages on the global market: impact on translation / interpreting practices
- Panel 10: Mediterranean crossroads
- Panel 11: Translation and conflict dissolution: unmasking complexities; voicing perplexities
- Panel 12: Mediating religion: translation, censorship and conflicting identities
- Panel 13: Contexts in translation education
- Panel 14: Translation Technology and Conflict
- Panel 15: Shaping Chinese modernity through translation
- Panel 16: Mediating the competing truth claims of testimonial
- Panel 17: World literature and translation
- Panel 18: Cognitive explorations of translation and interpreting processes
- Panel 19: Legal translation as mediation between legal cultures?
- Panel 20: Translation history: early translations and contemporary perceptions
- Panel 21: Global news, interpreting / translating and the projection of cultures
- Panel 22: Interpreter training in the global context

IATIS 組織委員会によると、最終的な大会参加者数は 337 名、基調講演者も含めた研究発表者数は 243 名であった。発表者の国は 37 カ国に及ぶ。ただし、これらは必ずしも出身国によるものではなく、発表者の所属組織別による統計である。中でも多かったのは英国(49 名)とオーストラリア(46 名)である。次いで中国(36 名、香港 13 名を含む)、スペイン(27 名)、米国(21 名)、カナダ(18 名)、イタリア(14 名)、南アフリカ(14 名)、インド(10 名)、ブラジル(10 名)の順であった。日本からは、日本通訳翻訳学会の鳥飼玖美子会長、船山仲也副会長他、理事の水野真紀子氏、長沼美香子氏をはじめとする計 9 名の発表が行われた。オーストラリアからの発表者の中にも本学会の在外会員が名を連ねている。スイスからも日本と同数の 9 名の発表があった。その他、それぞれ数は多くないが欧州(アイルランド、ドイツ、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、ポーランド、ルーマニア、オーストリア、スロヴェニア、フランス、ポルトガル)、南アフリカ(カメルーン、ナイジェリア)、中東(イラン、イスラエル、トルコ、アラブ首長国連邦)、アジア(韓国、台湾、マレーシア、シンガポール)、オセアニア(ニュージーランド)からの発表があった。発表者以外の参加者のほとんどはオーストラリアからの参加であった。翻訳通訳領域の研究者、大学院生、プロの翻訳者や通訳者、政策決定に関する担当者等が主な参加者であった。

今大会の発表は、全体テーマと各パネルのトピックを見ても分かるように何よりもその多様性に特徴がある。それは以下に示す基調講演の題目を見ても明らかである。基調講演には香港、トルコから各1名、オーストラリアから1組2名、英国から2名の計6名が招聘された。

1. *Rethinking Activism: The Power and Dynamics of Translation in China during the Late Qing Period (1840-1911)* (Martha P. Y. Cheung, 香港バプティスト大学)
2. *A tsunami after a disaster: Long-term implications of the Northern Territory Emergency Response* (Josie

Guy and Rose Laynbalaynba、オーストラリア北部特別地域アボリジニ通訳サービス)

3. *A 'Secularizing' Translation: The Call to Prayer in Turkish*

(Şehnaz Tahir-Gürçağlar、トルコボアジチ大学)

4. *The impact of video communication technologies on sign language users and interpreters*

(Jeff McWhinney、英国社会事業組織 Significan't 常務理事)

5. *The personal is interpersonal is political: Modelling translation and conflict*

(Francis Jones、英国ニューキャスル大学)

上記基調講演では、社会や国家の変革・変動期において通訳・翻訳が直面した問題や果たした役割、あるいは少数言語の通訳や手話通訳の現状と課題が提示されたが、こうしたテーマは今回の研究発表全体の傾向と重なる。特に異なる文化や価値観、紛争や対立の狭間に立ち、そこに橋を架ける仲介者としての翻訳・通訳あるいは翻訳者・通訳者の果たす役割を追究することを目的とした発表が相次いだ。IATIS 設立当初からの大きな共通課題である翻訳教育と通訳者養成については今回も高い関心が寄せられ、特に欧州から多くの発表が行われた。一方、今まで専門的な研究からは取り残されてきた手話通訳やコミュニティー通訳、Language Brokering 等の問題への熱心な取り組みが報告されたが、これらは日本でもその重要性が認識され始め注目を浴びている領域である。政治や権力が絡む様々な領域や国家に関する視点からは翻訳や通訳の倫理規範の問題や検閲の問題も大きく取り上げられた。またグローバルニュースにおける通訳翻訳の問題とその影響力についても活発な議論が展開した。参加者の多かった中国からの発表では、近代化と翻訳の関係が様々なテーマで論じられ明治期の日本とも関連する問題が提示され興味深かった。全体的に新たな通訳翻訳研究の枠組みや方法論を提起するというよりは、これまでの通訳翻訳研究の成果と枠組みに立脚しつつ、語用論、ブルデューの社会学、社会言語学、人類学あるいはポストコロニアリズム研究等他の研究領域との接点をはかりつつ、翻訳や通訳の実践データをコンテキストとの関連で実証的に研究したものが多かった。日本からの発表に対しては、日本というコンテキストにおける文化やコミュニケーションの概念、実践、研究、教育の現状に大いに注目が集まり、質疑応答では時間が足りなくなるほど活発な質問が飛び交った。

3日間を通し9つのセッションがあり、朝9時から夕方5時半頃まで基調講演を挟みつつ口頭発表が続いた。1つのセッションでは7つから10のパネルが同時進行であったため、各自が興味のある発表を全て聞くことはできなかったが、どのパネルでも大変活発な議論が行われたようである。毎日午前と午後30分ずつのティータイムがあり、約一時間の立食形式でのランチタイムとともに、参加者同士の親交を深め、情報を交換する絶好の機会となった。10日夜、メルボルン水族館でめずらしいクラゲに囲まれながらの賑やかなディナーをもって大会の幕は閉じた。大会プログラムと各研究発表の要旨は以下のURLからダウンロードできるので是非参照していただきたい。

<http://www.arts.monash.edu.au/lcl/conferences/iatis09/program.php>

.....

#### 【著者紹介】

坪井睦子 (TSUBOI Mutsuko) 立教大学異文化コミュニケーション研究科。専門は翻訳研究。

